OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜紹介＞堤和博著『歌語り・歌物語隆盛の頃ー伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学ー』 |
| Author(s) | 木下, 美佳 |
| Citation | 語文. 2008, 90, p. 57-58 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69109 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 紹介

### 堤和博著『歌語り・歌物語隆盛の頃 ―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』

木下　美佳

十世紀後半に編纂された『後撰和歌集』は、詞書に三人称的表現が見られ、物語化の傾向を有するという特色をもつ。この、歌集の物語化という傾向は、私家集においても見られ、十世紀後半は、まさに、歌語り・歌物語隆盛の頃であったといえる。このような時代において、なぜ道綱母に『蜻蛉日記』が書けたのか。堤氏の関心は、このような問題意識に由来する。この問題を究明するためには、『蜻蛉日記』に焦点を当てる前に、まず道綱母を取り巻く当時の文壇の状況を見極めることが必要となる。

本書は、【第一部】歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―　Ⅰ『一条摂政御集』研究〔第一章　他撰部の歌語り的歌群研究、第二章　他撰部の編纂（成立）に関する研究、第三章「とよかげ」の部研究〕、Ⅱ『本院侍従集』研究〔第一章　配列に施された虚構を中心とする諸問題〕、Ⅲ『蜻蛉日記』研究〔第一章　上巻欠文部の養女問題考、第二章　下巻の夢と夢解き・養女迎えの記事〕、【第二部】引歌表現研究〔第一章『蜻蛉日記』上巻の最初の引歌表現―「いかにして網代の氷魚にこと問はむ」―、第二章『源氏物語』の引歌表現研究〕、以上の構成から成る。

まず、第一部では、伊尹・兼通・そして道綱母の夫兼家の三兄弟が深く関わる作品が取り上げられ、歌語り・歌物語隆盛の頃の歌集編纂のあり方や、文壇の様相、虚構の意図への考察が纏められている。

Ⅰでは、伊尹の作である『一条摂政御集』の他撰部に、本院侍従・北の方恵子女王・小野好古女との、歌語り的な歌群が見られること（第一章）、伊尹を取り巻く歌語り・歌物語的なものは、他撰部に姿を留めていること（第二章）、他撰部が成立する中から歌物語的な「とよかげ」の部も生まれてきたことが指摘されている（第三章）。他撰歌集における編纂のあり方が示されている。

『一条摂政御集』にも登場する本院侍従については、続くⅡの『本院侍従集』で取り上げられている。兼通を男主人公とするこの歌集には、歌の配列に時間的な虚構が見られることや、兼通を惨めな人物に描こうとする意図がうかがえることから、編纂者は兼通側の人物だとは考えにくいことが指摘されている。伊尹没後の、兼通・兼家兄弟の政権争いにも触れつつ、当時の文壇の様相が分析されている。

Ⅲの『蜻蛉日記』では、兼家と源兼忠女との間の娘を道綱母が養女にした記事をめぐる文飾が、上巻・下巻からそれぞれ部分的に取り上げられ、道綱母の意図が示されている。

引歌表現を取り上げる第二部では、日常生活の会話・独白や手紙での引歌表現には、詠歌事情までも考慮している例（第一章）と、完全には合致しない例（第二章）が示され、散文における歌

語りの享受の様相が分析されている。

本書は、歌語り・歌物語隆盛の時代を掬い取る、大きな構想のもとにまとめられているのはもちろんである。しかし、抽象論ではない。それぞれ論を支え得る個々の作品論においても、たいへん詳細な解釈が施されている。本書で取りあげられている用例は、言葉の一致という程度というものではなく、事情や場面も配慮されたものばかりが挙げられている。用例数が少ない場合は、あらゆる状況の可能性を探られた上で、それを精緻に考証されている。丹念に先学の指摘の妥当性を洗い直していく氏の姿勢には、敬服するばかりである。氏は、今後、「当時の文学圏全体像の把握へ向かいたい気持ちが強い」とのことである。今後の論考がまたれる。

（和泉書院、二〇〇七年一〇月刊、四一九頁、一二、六〇〇円）

—本学大学院博士後期課程—